
愛を知らない国

蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛を知らない国

【Nコード】

N7905V

【作者名】

蓮

【あらすじ】

西英。昔の時代に飛ばされてしまうスペイン。そこで小さなイギリスであるイングランドと出会い、少しずつイギリスに対する感情に変化の兆しを見せていく。 国名、人名混在で5話完結。 短編のつもりで書いたものをわけただけの事です。 pixivやブログで同じものを載せています。

一（前書き）

スコットランド捏造により注意。

子供はいつの時代も愛らしいものだ。何しろ大嫌いである筈の彼の国でさえ、子供の姿であれば可愛いと思えてしまうのだから。今は可愛げなどあったものではない、彼の国を。

「……誰だ、お前」

目の前に居るのはぼさぼさの褪せた金髪に、特徴的な眉毛、それに“今”からしてみれば随分古風な緑のフードつきマントを身に纏ったどこか野生的な子供だった。

無論威嚇するような声を出したのも目の前の子供だし、それを向けられたのはアントーニヨである。

「うわー……イギリスがちっこなってもった」

彼の姿を目にして既に数分。驚きのあまり中々口が出来なかったその台詞をやっと吐き出す。

そう、この子供はよく知る隣国の昔の姿だ。丁度、アントーニヨが初めて彼を目にしたのがこれくらい時代の姿では無かっただろうか。何故急に小さくなったのかとか、何故こんな事になったのかとか、そんな事は置いておいて。取り敢えずは。

「お前みたいなちんちくりんでも、やっぱり子供はかわええなあ〜」
愛でる。

そのイギリスだとか、もしくは彼の腐れ縁でアントーニヨの悪友であるフランスス、同じく悪友のギルベルトなどによくペドだと言われるアントーニヨは、本当に子供が好きだ。

例えその相手が大嫌いなイギリスの子供の姿であろうと、子供は可愛い。それに変わりはない。

最早開き直り気味のアントーニヨは、小さなイギリスににじり寄った。

「かわえ・・・」

「近寄るな」

抱きついて頬ずりでもしようと思つくと近付くと、焦るでも怖がるでもなく、単純に、ただただアントーニヨを睨み付け子供にしてはやけに低くドスの利いた声でそう言った。

その様子はアントーニヨの思い描く「子供」とかけ離れていて。

「・・・前言撤回や。ぜんぜんかわゆう無いわ」

げんなりした顔でそう呟けば、「馬鹿じゃねえのか」と一言。

嗚呼、本当に可愛く無い。昔のロヴィーノも同じような事を言うてはいたが、それでも仕草や表情、声音は十分子供染みていて、何処か照れたような風もあつてとても可愛かった。「子供」らしく、子供だった。

なのにこの目の前の子供とくれば、冷めた低い声で近寄るなど言ったり、人を馬鹿にした言葉を放ったり、「子供」らしくない子供だ。それに多少なりとも感情が籠ってれば、少しは可愛げがあるものだというのに。

「・・・！」

突然イギリスが顔を勢いよく振り向かせて、ある一点をじっと見つめ始めた。一瞬“今”のイギリスがよく言っていた妖精とやらでも居たのだろうかと考えたが、その妖精を見る目にしては随分真剣

で、剣呑で、張り詰めた表情だ。

何なのだろうか、と考えているところでイギリスの表情が一瞬にして恐怖と後悔に歪んだ。

「よう、イングランド」

突如聞こえてきた声の発生源は、どうもイギリスがじっと見つめていたところから発されているらしい。

なんとなく、聞き覚えがある気がする声だった。何処かで聞いた事があるような、しかし無いような。あるとは思うのだが、思い出せない。

その声の持ち主は木の陰から姿を現した。小さなイギリスは、子供ながらにその気配を読み取ったらしい。成る程、子供でも立派な国らしい。今は最早平和になった世の中で、アントーニョや他の“今”を生きる国たちがそのような警戒をする事は無い。けれど、この子供にとっては今がまさに戦争の時代で、侵略に対抗する事に必死な時期なのだろう。

例えばこの子供のように、生まれた時既に戦う国と陸続きであればすぐに攻め込まれる。まだ力を持たない国であるイギリス、否、イングランドは、必死に抵抗するしか術を持たない。

しかしそれにしただって。

「にい・・・さ・・・」

この怯え様は、一体。

姿を現したのはまだ多分、イギリスのところの子供、シーランドと同じくらい、もしくはそれより少し大きいくらいの背丈のスコットランドだった。

確かにイングランドとスコットランド、否、スコットランドに限らず兄たちとの仲が悪いのはこの時代から知っていた事だ。それで

もこの時代、兄弟間で支配だの侵略だのは普通とは言わないまでも有り得ない事ではない。兎に角この時代は戦と支配と侵略が全てだったのだから。

だから、憎しみや恐怖を持つ事だつてあるだろう。だからと言って、この怯え様は普通ではない。

イングランドはただスコットランドをじつと見て微かに体を震わせている。

それを見て少しだけ脳内に浮かんだのは、イギリスの事だった。イギリスは、今日の前に居るイングランドと同じようにスコットランドを見て、もうイギリスの方が強いというのに酷く怯えていた。

「なあイングランド、いつもみたいに逃げなくていいのか？」

アントーニヨの存在に気付いているのかいないのか（いや、こんなにこの時代に似合わない服でこの背丈なのだから、それは有り得ない気がするのだが）それとも端からイングランドしか見ていないのか、スコットランドはい、と意地悪く笑ってイングランドにそう問いかけた。その言葉と同時に手を後ろに回し 弓と弓矢を取り出しそれをイングランドに向けた。

イングランドはそれに反応したし、青ざめもしたけれど、逃げ出そうとする様子は無い。「いつもみたいに」と言っただけには、いつもは逃げているのだろう。それなのに、イングランドは逃げ出さうとしない。

「イギ………、イングランド……？」

イギリスと呼びそうになって、直す。アントーニヨのところでは「イングラテラ」だけれど、それはスペインという国である事をばらさない為には呼ぶ事は躊躇われた。

その間にもアントーニヨの存在をすっかり無視して、スコットラ

ンドは弦を手前へ引っ張っている。

イングランドは、やはり逃げない。スコットランドと、その手に握られた弓をじっと見つめて、体を震わせているだけ。青ざめてい
るし、冷や汗は凄い。今すぐにも逃げたいのではないのだろうか
と思わせる様子なのに、それをしないのは何故なのか。

「………フン、」

小さく面白くなさそうに鼻を鳴らして、真っ直ぐにイングランド
の頭に焦点を合わせていた弓矢をその小さく細い腕に移動させ、そ
の瞬間にそれを放った。

それでも動こうとしないイングランド。

「イングランド！」

叫んで、1メートル程に距離を空けて立っているイングランドの
元へと駆け寄る。

「……っ!？」

イングランドが息を呑むのが解った。アントーニョの腕に刺さっ
たそれは、薄茶色の衣服に赤い染みを作り始めた。

スコットランドはアントーニョの腕に刺さったのがまるで嘘のよ
うに、面白くなさそうな顔をして去っていった。まるで、アントー
ニョなど存在していないかのように、最後までイングランドから目
を離さずに。

そして丁度弓矢の刺さったアントーニョの腕と重なるイングラン
ドの腕の部分を、じっと見つめたまま。まるで、アントーニョでは
なく、イングランドの腕に弓矢が刺さったのだとも言いたげにそ
こ以外を見なかった。

そもそもこんな時代にアントーニヨは居る筈が無い存在だ。もしかしたら、イングランド以外にアントーニヨの存在は見えていないのかもしれない。

「何でお前……っ」

イングランドが焦ったように矢が刺さっている箇所を見つめながらあわわとしてしている。痛いし血は出ているが、国として確立した存在のアントーニヨはまだ国としての立場が弱いイングランドとは違い、何か支障をきたすような事は無い。例えば何か作業をする際に痛みを伴ったとしても、それ以外に特に何か不便な思いをする事は無いのだ。

逆に、そんなに慌てていながらそこから一步も動こうとしないイングランドに疑問を持った。

「……お前、さつきから一步もそこから動かへんけど、どないしたん？」

イングランドの肩が跳ねる。

単刀直入すぎたろうか。

そういえばスコットランドが出てきてからどこか、アントーニヨと出会ってから一度もそこから動いていない。上半身を僅かに動かすところは見たが、足などは絶対に動かしていない。

「……怪我、か？」

腕の怪我など忘れて、更にイングランドに近寄る。可愛く無い子供。

そう思っていたけれど、これは、もしかしたら、この時代のこんな場所で生まれ、こんな生活を送っている子供に可愛さを求め

る方が間違っているのかもしれない。外見的に可愛くても、内面的には、仕方が無いのだろう。

そんな事を考えながらイングランドの足元を見る。近寄るなという言葉と共に沢山の罵詈雑言を貰ったが、そんな事は今のアントーニョには関係無い。

イングランドの足元にはまだ新しい血。

「やっぱり、」

怪我か、と続けながらイングランドを抱き上げようとして、気付く。イングランドの足には傷は確かにあるが、軽いものである。掠り傷程度のもので、どう考えたってこの量の血を出すのは小さすぎる傷だ。

イングランドを抱き上げる。出血していたのはイングランドよりも、イングランドが覆い被さるようにして隠していた白い動物だった。

「、うわ、ぎょ？」

兎の後ろ足にはあの、動物を引っ掛ける為の罌が食いついていた。成る程この小さな子供は、罌に引っかかって動けない兎が誰かに殺されないように、自分の衣服で隠していたわけである。なんと心優しい少年であるう事か。その為には、自分自身が傷付く事すら厭わないなんて。

「っ、そいつに手え出すな！」

アントーニョがこの兎を食べてしまおうとも思っているのだろうか。イングランドは必死に叫んだ。ぼこぼここと、いや、そんな生温い音ではなくボスンという表し方が最も適当であるう音を立てなが

ら、アントーニヨを叩くというより殴る。子供にしてはやけに力が強く、その細い腕では想像もつかないくらいだ。しかし大人のアントーニヨをそれでどうにか出来るわけもない。

抱き上げたままのイングランドを降ろし、兎に手を伸ばす。

「やめる！」

その邪魔をするようにアントーニヨの腕にしがみついていたイングランド。 たった兎一匹の為に、もしかしたら自分が酷く痛い思いをするかもしれないというのに、何故こうもこの少年は。

しがみつかれた腕とは反対の手をイングランドの頭の上に乗せる。びくり、と震えた肩に苦笑して、そのぼさぼさでところどころ煤がついてしまっている頭を撫でた。ごわごわとした感触。

「大丈夫やから、親分に任して？」

驚きの表情で固まってしまったイングランドに言う。イングランドの腕を撫でているのは弓矢が刺さった方の腕で、その傷が痛みはしたがそれくらい何のその。

その撫でていた腕を再び兎に伸ばし、しがみつかれていた腕をイングランドからそつと離す。兎は既に逃げようという意識と気力すら失っているようで、開いたその瞳にアントーニヨの手は映っている筈なのに反応すらしなかった。

*

*

*

「よし、これでええやる」

一言元気な声を発して、アントーニヨは立ち上がる。

イングランドがほっと息を吐いて、今し方手当てしたばかりの兎をその小さく細い腕で抱き上げた。

アントーニヨのポケットに入っていた内職用の布テープが役に立った。あまり量は無かったが、小さな兎の足の手当てをするくらいになら十分な量だった。

「おい、座れ」

いつの間にか兎を降ろしていたらしい。両腕を自由にして、イングランドがアントーニヨにそう言った。イングランドの意図は解らないが、この子供にはアントーニヨを傷つける意思は無いだろうし、そんな事をする子供でもないだろう。

アントーニヨは素直にそれに従ってその場にあぐらをかいた。

それを見届けて、イングランドは突然走り出した。木やよく解らない草が生えているところへ行つて、それをむしり取ってからまたアントーニヨのところへ戻ってきた。それを細かくちぎつて、手のひらでもみくちやにし、半ば液体状になったそれをアントーニヨの腕の傷へと塗りつける。とっくに矢は抜いてあるそこは、もう殆ど血も止まっていた。

イングランドのよく解らない行動に首を傾げずには居られない。

「……俺と俺の友達を助けてくれたから、お礼だ。この草は潰して傷口に塗るとよく効く。

……本当は、もっとちゃんと潰せればいいんだが、此処にはそんな道具無いから……」

律儀な子だ。イングランドを庇った事はイングランドが兎を庇っ

た事と同じだし、兎を助けたのはイングランドを助けたわけでもないというのに。

警戒心すら解ければ、この子は子供らしくは無いが可愛いところもあると思える。こんなところに生まれてしまったせいで、子供のままでは居られなかったのだろう。早く大人にならなければ、消えてしまいかねないこの場所で。それでも体や国土、国の力というものがそんなに早く成長するわけがない。中身ばかりが大人になって、体は追いつかなかったのだらう。こんなにも小さくて、頼りない体で必死に兄達の侵略に耐え続けてきた。

「……ん、おおきに」

複雑な心境だった。

大嫌いな彼の国の、子供の時代。幾ら子供でも、あの国である事には何ら変わりはないというのに、どうしても同一視出来ない。というか、同一視どころか、イギリスという国そのものに対する意識が変わりつつある。

この子が将来、アントーニョにあの忌むべき行為をしてくる事だつて解りきつている事だというのに。イギリスが、過去にアントーニョに仕掛けた行為は拭えない事だというのに。

「(何だかなあ……)」

見た事も無いイングランド。昔の、この時代のアントーニョはこの時代のイングランドを知っている。けれど、イングランドのこの“姿”には気付けなかった。否、気にもかけなかった。兄弟も、愛すべき存在も居らず、愛の無い支配に何とも思っていなかった時代だった。だから、彼と兄との関係や、彼の本当の“姿”に、気付くうとすらしなかった。

気付けていれば、今とはまた違う何かを、イギリスと築けていた

かもしれなかったのに。アントーニョはそこで初めて、イギリスと
いう存在の根本に思考をやったのだった。

一（後書き）

本当に小さなイングランド。特にどの時代と決めてはいませんが、金色毛虫がそれより少し前くらいの時代だとお思ってください。

私が書く小説作風によって、お馬鹿さんなイギリスや騒がしいイギリスはかなり少なめです。

まあ今作も、それによるものでちびりすがかなり物静かで大人しい性格になっております。

感想など下さると私は飛んで喜びます。

二（前書き）

史実ネタを少し含みますので注意。

目を開いて真っ先に見えたのは、屍の山々だった。それ以外には焼けた木々や中途半端に育った植物などがあるだけで、実に殺風景だ。

確か眠った時には目の前にはアントーニヨの腰程も無い小さな背丈のイングランドが居て、ついでにその小さな体を腕に抱いて、ただっ広い緑以外には何も無い草原の上で横になっていた筈で。それが、何故目覚めたらこんなにも血生臭い場所に居るのだろうか。しかもあんなにも晴れていた空は、どんよりと暗く重苦しい。今にも雨が降ってきそうだ。

しかもイングランドの姿も無く、屍はあるのに生きた人の姿はひとつとして見当たらなかった。

何故こんなところに居るのかは解らないが、此処がどんなところなのかという事だけは簡単に解った。何しろ何世紀も昔は、スペインの国土でも当たり前のように繰り広げられた光景だ。

「此処もイングランド、なんかなあ・・・」

“今”はもう何処の国でもこんな光景は見られない。例え戦争が勃発していたり、しそっだったりしている国ですら、こんな風景は無い。あつたとして、全焼してしまった本当に何も無い光景か、軍服を着た兵士や普通の服を着た一般人の亡骸だけで、このような“昔”を思わせる光景は、見る事は出来ない。

懐かしいなどという思いをくすぐられる事は無い。こんな無惨な光景は、出来る事なら見たくは無かった。死と恐怖と血の臭いしかない、こんな悲しい戦場なんぞは。

アントーニヨが寝ていたのは丁度木の下で、そこは実際に戦があったのだから場所からは数百メートル離れている。おかげで服が汚れている原因はあの矢に当たった時の赤黒い血と、今まで寝転んでいたであろう土だけだった。

何とも無しに死骸の山へと近付いていく。一歩一歩足を進める毎に強くなる異臭は、しかしアントーニヨの足を止めるには至らない。何しろ幾百、幾千年と昔とはいえ、この光景をアントーニヨ自身も何度も見てきた。それほど昔から存在する国である限り、この光景に出会わずには居られない。

血と傷だらけの死骸たち。それが足元に来る距離まで歩いてきて、アントーニヨは目を閉じた。追悼の言葉は言えないが、黙祷を捧げる事は出来る。この兵たちが一体何処の国のどういう人物なのかは解らないけれど、“国”のために一生懸命に戦った何処かの国の息子たち。その事実だけで、アントーニヨが見もしない人たちに黙祷を捧げる理由は充分だった。

黙祷を捧げ終えて目を開く。途端、目前十数メートルのところから弓矢が飛んできて慌てて避ける。

「お前、何者だ」

聞こえた声は、あの少年の声と似ていた。ただ、少しの変化も無いその声の持ち主自身はしかし、声とは裏腹に少しの成長を見せていた。丁度昨日（と言って差当たりがあるのかないのかは不明だが、時間の概念というものが希薄な此処ではそういうしか無いだろう）見たスコットランドと同じくらいに育った彼は、しかし見紛う事無きイングリンドだった。

服装はあまり昨日とは変わらず、しかし手にはロングボウ。瞳に映るのは明らかな敵対心と警戒だけで、それも昨日の会ったばかりの彼と何ら変わらない。幾ら国とはいえ、一日でこんなに成長する筈が無い。普通に考えたら答えを導き出す事は不可能だが、昨日あ

の小さなイングランドに会った時点で普通ではない事が起きているのは確かだった。一度普通ではない事が起きれば後に何度続いてももうそれはその場合に限って驚くに値しない事だ。つまり、時代が少しだけ移り変わったのだろう。

「……………スペイン？」

そんな事を考えているとまたもイングランドから声が上がった。訝しげな声だった。

この時代、此処までイングランドが育ってきたのであれば、スペインという国もそれなりに育ってきて、「今」のアントーニヨの面影を持つてくるだろう。であれば、イングランドがそう声にしたのも頷ける。

「……………いや、違うか。あいつはこんな、でかくねえし……………」

先ほどの台詞を彼自身が否定する。けれど、その視線は決してアントーニヨから外されない。いつの時代も、彼は警戒心が強いらしい。「今」のイギリスさえも、平和な時代が来たというのに警戒を崩す事は無い。フランシス曰く、侵略や戦争が普通だった時代よりは大分薄れているらしいが、それでもアントーニヨからしてみればそんなに警戒する理由が解らなかつた。

今動くともた矢を放たれかねない（何せ彼は先程放ったばかりだというのにもう既に構えている）ので動く事はしない。が、頭の中では昨日の彼と、イギリスと、今目の前に居る彼の事に関して、滅多に使わない頭をフル回転させていた。

「変な格好しやがって……………しかもこんな戦後の場所に、何の用があつてきた」

狙いを決してアントーニヨから外さず問うイングランド。
その疑問を持つのは妥当だろう。普通、こんな戦が終わった後の場所にやってくる者など居ない。例え生き残った兵であろうとも、こんな見るも無惨な光景を態々目に焼き付けようとはしないだろう。けれど、アントーニヨの中には同じくらいの違和感をイングランドに対して持っていた。

「……………お前は何で此処居るん？」

アントーニヨが此処に居ることは確かに不思議ではあるだろうが、しかしそれを言うならば、同時にイングランドが此処に居る事だつて不思議なわけで。普通、こつやつて戦争をするようになってきた国であれば部下と一緒に居る筈だ。それなのにこの子は、それもせずもしかしたらとても危険かもしれないこの戦後の場に顔を出した。イングランドが息を呑むのが聞こえた。その顔が、苦渋に歪む。その表情を見て、何となく解った気がした。その視線はアントーニヨから逸らされ、亡骸が山ほど倒れているそこへ向けられている。それだけで悟れるほど、アントーニヨは戦というものを経験してきた。

イングランドは。

「他者にそう簡単に言えへん事なら、無理に言わんでええ」

その気持ちと、それをしようという思いやり。それは解るし、良い事なのだろうが、この時代の背景で言うとな彼の心遣いは無駄としか思われない。邪魔なのだ。彼の部下とも上司とも言える存在にあって。

だから、他者にはそう易々と言えない。

死者に、黙禱を捧げに来たなどと。

「・・・・・・・・」

イングランドは唇を噛み締めて、目を閉じた。

傍から見ると解りづらいがきつとそれが、せめてもの懺悔として捧げる黙禱なのだろう。国として当然目にして、血を流して死んでいく人々を当然のように見ているのに、彼はそれを当然とはせず喋った事が無い存在にすら、酷く辛そうな顔をして。

これがそのまま大人になっていれば、アントーニョがイギリスを嫌う事も無かつただろうに。国として存在して、その過程で色々辛い思いや、そうならざるを得ない経験をしてきたのだろう事は想像出来るけれど、それでもやはりどうしても反りに合わないのだから仕方が無い。

そんな先程から休められない思考を未だに動かしていると、イングランドが踵を返した。

来た方向へ歩いているのを見て、特に何も考えず、帰るのだと理解した。

「なあ、俺、行くところないんやけど・・・」

その背中に向けて小さく言葉を投げかけると、彼は肩越しにこちらを振り向いて溜息を吐く。

「行くところねあって、お前本当に何者なんだよ。・・・・・・・・まあ、害はねえみたいだから好きにすればいいさ。ついてくるもよし、野宿するもよし。ただし、ついてきたとしても大した世話はできねえ。こっちだつていっぱいいっぱいなんだ」

そう言って再び歩き出したイングランドの後ろを、言葉通り勝手にさせてもらう事にしてついていく。

この時代が一体、どのような事をしている時代なのかは正直解らない。使っている武器からして、まだまだ昔なのだろうという事は解るけれど。

その背中は、まだまだ子供だというのにすっかりしていた。否、違う。これは。

「なあ、此処、何処なん？」

「……まさかお前、記憶喪失か？此処は……」

沈黙に耐えられなかった、なんて、そんな事は決して無いが、それでも気になつていた事ではあった。先の光景は何も一国に限った事ではなく、戦争をしている国なら何処でも見られる光景なのだ。イングランドが居るのだから、イングランドの国土だと思うのが普通だろうが、戦争の相手国に居るといふ可能性も無くは無い。

だが、皮肉の後に続くのはイングランドだといふ事を予想していたアントーニヨの耳に届いたのは違う国名だった。

「フランスだ」

彼がそう言った途端、いきなり視界が開けて広いところに出る。そこには大きな人だかりが出来ていた。

フランスだと言われても、驚きはしない。イングランドと、イギリスと、最もよく戦争をしていたのはその国だからだ。

喧騒の中、イングランドは見つめるアントーニヨを無視してぐいぐいと人ごみを掻き分け進んでいく。その先に何かあるのか、何を思っているのか、一瞬見えた横顔は強張って張り詰めていた。とてもではないが、子供が見せる表情ではなかった。

アントーニヨもそれを追う。イングランドは人だかりの中を進みづらそうに進んでいくのに、アントーニヨは随分簡単に進めた。それはイングランドが掻き分けた後をついていつているからか、それ

とも。

まあ、いい。今はそれより。

そこまで考えたところで、再び視界が開けた。そして目の前にあったのは。

「・・・・・・・・・・・・・・・・魔女狩り、」

ぼそり。呟いた言葉に、イングランドの肩が跳ねた。

目の前にあったのは、今まさに火刑に処されようとしている、フランスの英雄の姿だった。

火刑は、この時代の処刑では最も残酷かつ無慈悲なもの。熱さと酸欠という苦しさの中、すぐに殺される事もなく足元からじわじわと炙られていく。その苦しみは実際に味わったものでは解らないだろうけれど、想像するだけでも充分嫌なものだった。

それを、今20にも満たない少女が味わおうとしている。英雄として、祖国の為に尽くした、少女が。

点火されようとしているそこから、イングランドは目を逸らさなかった。あんなにも顔を強張らせていたというのに、その光景はこの小さな子供には辛いだろくに、決して目を逸らそうとはしなかった。

神よ、何故なのでしょう！

叫び続ける彼女の声を、イングランドは耳を塞がず聞いていた。

鬱血するのではないかというくらい強く、唇を噛み締めて。血が滲みそうなくらい、拳を握り締めて。

点火された、その瞬間も。目を、逸らしはしなかった。

点火された途端、彼女は黙り込んだ。神に問い掛け続けた彼女は、点火された瞬間、そのたった一瞬で、まだ19歳の生涯を終えるというその全てを受け入れたのだ。

「っ………！」

息を呑む音が聞こえてイングランドを見る。沸き立つ周りの中で、彼はただ静かに、握り締めた拳と噛み締めた唇はそのままに、飛び出るのではないかというくらい、目を見開いてその様子を見ていた。残酷な光景だ。子供に見せるべきではない光景だ。彼のような心優しい子が見るには、酷すぎる光景だ。けれど彼は、刑しているのがイングランド軍だという理由だけでそれをじつと見守る。

今にも泣き出しそうな顔をしてそれを見ているのに、イングランドは最後まで、泣きはしなかった。

* * *

泣き崩れる民衆。彼女が魔女ではないと解った途端に、あちらこちらから懺悔の音が聞こえてきた。

イングランドはそんな人だかりを後にした。アントーニヨもその後を追う。拳は握り締められたまま、それでもぴんと伸ばされた背にしっかりとした足取りは、イングランドという国としての意地と誇りとイングランドの民に対する意思。

イングランドとフランスは今、敵対関係にある。その敵国の少女を処刑して、その祖国が、国の象徴が、国の代表が悲しんでいるなど。本心で悲しんでいても、それを表に出してはいけない。そう、考えているのだろう。何と哀れな子供であろう事か。

「いつまで」

痛々しくて仕方が無くて、どうしようもない気持ちで、イングランドの後ろを歩く。

何も言わずに追い続けると、イングランドが突然、立ち止まって口を開いた。

ん？と聞き返す。

「いつまで、ついてくるつもりだよ」

相変わらずその背中はずんずんと伸ばされており、肩も震えてはいなかった。

泣けばいいのに。泣いて、すっきりすればいい。溜め込むから苦しいんだ。そう伝えたくても、伝えられない。イングランドにはイングランドの覚悟があり、だから態々あの辛いだけの光景を見届けた。それに無責任に、気持ちも知らずに泣けなどとは到底言えまいけれど、アントーニヨには泣いてほしかった。まだ彼程の小さな子供が、泣くのを我慢している光景程痛々しいものは無い。

あの少女の事については、アントーニヨはあまり何も感じなかった。可哀想だとか、まだ人生はこれからなのとか、思う事は沢山あったけれど、“今”のアントーニヨからしてみれば過去の出来事で、ついでに直接的関わりは無い。彼やフランスの国民程強い想い入れがあるわけでも、何か思うところがあるわけでもなかった。

だから、それよりも。それよりも、彼が泣かない事の方が、アントーニヨにとっては痛々しく見ていられない。

「……………行くところ、ないんやって」

最初会った時よりも、ずっとずっと声を和らげて言う。

イングランドは何も言わず再び歩き出す。その小さな肩は、やはり震える事も無ければ力なく落とされる事も無かった。

* * *

森の中、イングランドは動物たちを愛でていた。やはりいつの時
代もイングランドはイングランドらしく、動物好きは変わらない。

それでも動物に向けるあの柔らかい表情は今は無く、ただ感情を
押し殺したような無理矢理作った無表情がそこにはあった。悲哀や
後悔など、様々な感情が渦巻いているんだろう。それでもイングラ
ンドはそれを表情に出さないよう必死だった。

ちくり。アントーニヨそんな顔をさせているわけでもないのに、
胸が痛む。

「あ………」

小さく声上がる。イングランドが撫でていた兎や、肩に乗って
いた鳥が一齐に何処かへ去ったからだ。多分、イングランドの様子
に彼らも不安になったのだろう。動物というのは人の心情を鋭く見
透かす。

今度こそ微かに悲しみの色が瞳に浮かんだのを、アントーニヨは
見逃さなかった。

「イングランド」

兎の去る姿を視線で追いかけるイングランドに呼びかける。

我に返ったかのように勢いよく頭を振ってこちらを向くイングラ
ンドに、かつて、否、今も尚愛しい子分に向けるその優しく暖かな

笑みを見せた。

驚いたように体を硬直させて、じつとこちらを見るイングランドに、しかし表情は崩さず言う。

「おいで」

短く告げたそれに、イングランドは動かない。両手を大きく広げて迎え入れる態勢を作っても、一歩もそこから動かなかった。驚きの表情ばかりが浮かんで、それ以外が見て取れない。驚いて硬直しているのか、それとも警戒して硬直しているのか、はたまたプライドと葛藤しているのか。

それら全てなのだろうと思った。

「親分が、抱きしめたる」

それでもイングランドは動かない。けれどアントーニヨから動く事はしない。彼は動物と同じだ。アントーニヨから動けば、警戒して逃げる。だから、彼から動いてこちらへ来るまでじつと耐えるのだ。

嗚呼、早くこの胸に飛び込んでくればいい。早く、抱きしめられればいい。子供のように、子供らしく、大人に抱きしめられて、人の温かさというものを知ればいいのだ。国だろうが人だろうが、生まれてからある程度育つまでは、大人の庇護下に置かれるべきで、そうでなかったとしても、兄からあのような仕打ちを受けながら寂しい生活をしては駄目だと、アントーニヨは思う。

「おいで、イングランド」

もう一度、変わらない声音と変わらない表情で言う。イングランドは小さく肩を跳ねさせて、頭を僅かに揺らした。

その表情には明らかかな悲しみと後悔と恐怖の色が見て取れた。しかしそのどれも、アントーニヨの行為と、アントーニヨの元へ向かうものではなく。先程見ていた、あの光景に対する悲しみや後悔、恐怖だ。

今にも泣きそうに顔を歪めた彼は、ゆっくり、小さな歩幅でのろのろとアントーニヨが腕を広げるそこへと向かい始める。

少しずつ、少しずつ近付いていく距離。

「……………ええ子やな」

すぐそばまで来て立ち止まったイングランドを、両腕でしっかりと抱きしめて、頭を優しく撫でる。

それをするには少しこの子は大きくなりすぎたかもしれない。けれどそれでもいいのだ。いつその事、赤ん坊にするようにべたべたに甘やかしてもいいくらいだと思っているのだから。

過剰なくらいの甘やかし方だというのに、イングランドは抵抗もしなければ抗議の声すら上げなかった。それ程に深く、あの光景がこの子の心を蝕んでいる。

「泣きたいなら泣けなんて言わへん。けど、」

痛みを感じないように、けれど力を入れてぎゅっと抱きしめて、頭を撫でながら変わらない優しい声音でアントーニヨは口を開く。

「此処には俺とお前しか居らへんよ。俺はイングランドの人間でもフランスの人間でも無い。お前が泣いても、見咎めるもんは居らへんねん。……………居らへんのか」

優しく、大丈夫だと告げるようにあやしなから、アントーニヨは撫でている手をイングランドの後頭部に当てて、その顔を自分の肩

に乗せた。こうしたら、見えないから。それを伝えるつもりで、ぼんぼんと、頭を軽く叩いて。

息を呑む音も、嗚咽も、咽び泣く声も、何も聞こえては来なかったけれど。それでも肩に感じたもので、彼が静かに、静かに泣き始めたのだと悟った。

何となく、アントーニヨにあんな事をした理由や、あんな風に育ってしまった理由、あんなにも弟の独立に拘る理由が解った気がした。彼自身が、物語っていた。

溺愛する理由が解らないわけではない。アントーニヨだってロヴィーノを溺愛したし、今でもあの子はアントーニヨの中で愛しい子分で在り続けている。それなのに構わない理由や、溺愛する理由が解らなかつたわけではなかつた。寧ろ、よく解った。彼の行動や言動で解ったのは、唯一そこだけだつた。何故独立にそこまで深く拘るのか、とかそんな事解りもしなければ解るうともせず。けれど今、理由が解った気がした。

自分が甘えられなかつた分、自分が甘えさせてもらえなかつた分、自分が弟として、兄達からの愛情をもらえなかつた分。イギリスは、その分だけ、あの今は超大国となつた弟を、可愛がりたかつたのだ。独立してしまえば、関係性は少なからず変わる。事実あの子供はこれでもかというほど天邪鬼になつたし、イギリスに対して甘えもしなければイギリスの世話すら突っぱねた。それを恐れたからこそ、独立を最後まで認めなかつた。独立後はといえ、その日々を思つて、与える愛を持て余して、そして執拗になつている。

幸いロヴィーノは殆ど変わりはしなかつたけれど、あの子は変わりすぎてしまつたから。

「はよ強うなつて、大きくなれ、イングランド。そしたら、俺が全力で相手したるから」

きつとイングランドには意味が解らなかつただらう。それでもい

いのだ。これは、アントーニヨ自身の、誓い。

“今”に戻ったら。

イングランドは、泣き疲れて寝てしまうまで、その最後まで、声を上げる事はしなかった。

二（後書き）

名前は出していませんが「あの子」のネタを入れました。

一応、アーサー好きとして言わせてもらおうとイングランドだけが悪いのではなく、寧ろフランスの方が酷い事してますよ、と。

まあ、気になる方は色々なところで調べてみるといいかと。一か所だけだと間違った情報であることが多いので。

西英が増えてくれることを日々祈っています……………。

三（前書き）

時代背景はあまり詳しく知らないので矛盾などがあったとしても見逃してください。

全く以て理解が出来ない、というより、不思議な事が連続して起こっている。本当にこれは一体、アントーニヨにどうしろというのか。二日連続で子供のお守りをして散々甘やかすハメになったかと思えば（どちらともアントーニヨのお節介ではあるのだが）、今度はこの目の前の少年というべきなのか判断しかねる相手に、何をしろと。

しかしこの状況は既に三度目だ。“今”の時代に眠りについて、うんと昔に飛ばされて、そこで眠りにつき時代が進み、そしてまたそこで眠りにつき、此処に飛ばされて。 。

青年になりかけの少年。そういうのが妥当なのだろう。まだ体は出来上がっていないし、“イギリス”よりも小さい。そんな子供が目の前で寝ていた。そして此処が、此処が、船の上である事を考えると多分これは。

「……………アルマダか」

アントーニヨがイギリスを憎む原因となったその出来事の真つ最中、というわけなのだろう。

ああどうしてか、その最中だという事が解つてもアントーニヨの心は静かだった。その事に苛立ちを感じる事も彼に対する憎しみが蘇る事もなく、静かに、ただ静かに、目の前の彼を見つめる事が出来た。

苦しげに眉根を寄せて眠る、目の前の彼を。

「大勝利を掴んで世界に冠した言っんに、何でお前はそんな苦しもうなん……………」

イギリスは今でもこんな風に、眉間に皺を寄せて眠るのだろうか。アントーニヨが知っているこの時代のイングランドは、酷く愉快そうに笑っている姿だけだった。人を見下したように笑うだけで、それ以外の、ましてやこんなにも苦しげな姿や表情など。

アントーニヨが居るのは船の上のある一室だった。それで何故船の上に居るのか解ったのか。そんなもの、過去に何度も船に乗った経験のあるアントーニヨには、揺れ具合と懐かしい潮の匂いで易とも簡単に把握できる。

その一室にはどうやら滅多な事が無い限り部下などはやってこないらしく、全く誰も居なかった。部屋の外から足音が聞こえてくる事も無い。

酷く殺風景な部屋だった。呆れる程、大袈裟な程に様々な装飾品がついていたあの衣装が壁にかけられているが、それ以外は特に何か色を飾るようなものは無い。彼の眠るベッドですら、ちよつとした簡単なものにシーツをかけた程度の質素なものだった。

あの大袈裟の衣装の下にあるのは全盛期で以てしても貧弱で細い体。多分、彼が彼自身を「大きく」見せる為のものだったのだろう。しかし今はそれを脱いでしまっていて、その細い体が解りやすくなっていた。その細い体と部屋の様子を見ていると、とても世界に冠する者の部屋とは思えない。

嗚呼、気付けなかった。仮面を剥いでしまえば、彼はこんなにも貧相で。あの豪華な衣装を身に纏っていないと気を張る事すら困難で。

否、気付けなかったのではなく、気付かなかっただけだろう。

睫毛の影がかかるその頬は、血色がいいわけでもなければ悪いわけでもなかった。この最盛期を思えば普通ならば綺麗なピンクをしているだろうに。

その頬に親指の腹を軽く押し当てる。そのまま目許をなぞって綺麗な金髪まで移動した。ところで、首元に何かか押し付けられた。

「……………起きたん？」

イングランドは片目だけを薄っすらと開けていた。それはアントーニョがなぞっていた方の目ではなく、首元に押し当てられたのはきつと本物で鋭利なナイフ。

イングランドは冗談でこんな事をする奴ではない。本物のナイフを押し当てればそれは死刑宣告だ。吐かないと殺す。もしくは降参しろ。そんな、脅し文句にも等しい。今は別にそんな事は無いけれど（寧ろそんな事があれば国際問題だ）、この時代のイングランドをよくよく思い出してみると、彼はそういう人物だった。

「……………寝首を掻くつもりか」

長い溜めを置いて吐き出された台詞は、アントーニョの問いに対する答えではなかった。そもそも答えなど期待していなかったのだが、それにしたって随分低い声を出すものだ。

そして第一声にその言葉が出てくる辺り、ある意味彼らしいと思っただ。別に彼の事をそこまで知っているわけではない。というより寧ろ殆ど何も知らないに等しいが、それでもアントーニョの中で形作られた彼、つまりイメージにぴったり当てはまっている。

「……………？スペイン、じゃ、ねえ…………？」

訝しげな声で小さく呟かれたその言葉に、大した洞察力だと感心する。この時代のアントーニョと今のアントーニョで言えば、殆ど背丈は変わらない。多分変わって数センチくらいのものだ。多少雰囲気は変わったとしても、大きなところは変わらないだろう。

外見で一番変わっているとすれば服装と髪型だろうが、それだけで簡単に誤魔化せる。それを何も言わずに気付こうとしている彼は、

よっぽど人を注意深く観察しているのだろう。

今までは「スペイン」という国そのものである事を誤魔化してきたけれど、それでも今回は何故か、誤魔化さずにちゃんとやってしまいたかった。そうしなければならぬ気がした。滅多に働かない直感というものが、今この時働いたのだろう。

「俺は、スペインやで」

静かに告げる。沈黙の間に落ちたその言葉は、何より重く音を立てて彼の心のうちへ入り込んだだろう。

く、と首元のナイフに力を込められる。少しでも動けば食い込んで血が流れそうだった。

「どづい事だ」

それには様々な問いが込められていた。まずスペインという国であるならば、雰囲気や服、髪の違いについて。スペインという国が何故武器も持たず敵国の船に乗り込んでいるのか。そして、それ以前に何故、此処にいるのか。国という存在が乗る船だ。どの船よりも嚴重に警備されている筈で、そもそも今負けかけている、もしくは負けてしまった「スペイン」は、もつと傷だらけで、そしてこんなところへ来ている余裕も来る事が出来るような体力も無い筈なのだ。

多分それら全てに対する疑問なのだろう。しかしアントーニヨはそれには答えず、黙ってイングランドを見つめ続けた。

その表情は明らかに疲弊していて、とても勝利を収めただろう、収めるだろう国がするような顔ではない。

「お前の知つとるスペインやないけど、俺は、スペインや」

スペイン。その国の名前は、それがどのような形であれ今彼の中で一番大きな部分を占めているのだらう。スペインではないと疑った瞬間の彼の気の緩みようは、尋常ではなかった。ナイフは離れていかなかったし確かな殺意も変わらなかった。けれど、その表情が安堵の色を見せたように見えて。

答えではない真実を、彼に伝えた。途端に飛んできた蹴りを、避ける暇は無かった。ダメージを軽減する事くらいは出来ただらうが、敢えてそれはしなかった。彼に敵対意識は無いのだと伝える為ではなく。

首元に突きつけられていたナイフは無論引つ込められていて、それがアントーニヨの肌を掠る事は無かった。

「ふざけてんじゃねえぞ」

地面に仰向けに倒れたところで、彼は上に跨って今度は顔目掛けてナイフを突きつけてきた。

殺気は増すどころか、弱くなっている。その意味するところは解るようで解らないよう。彼の考える事はよく解らない。解り易すぎると思っていたのに、それは全くの誤解だった。

てつきりこの海戦を楽しんでいるのかと思っていたのに。それなのに、彼は全く愉快そうな顔など微塵も見せない。

「なあ、掴んだ勝利の味、どないやった？」

びく。彼の肩が揺れる。

その瞬間、確信した。彼はこの「戦勝」を体全身で喜んでいるわけではない。国民は喜んでいるだらうし、女王は勿論の事その勝利を噛み締めているのだらう。それを象徴するイングランドは体面上喜び、彼自身喜んでいると思っっているが多分、心の何処かで疲れているのだらう。

幾ら戦争を繰り返して勝利というものによがっていても、過去はたった一人の少女の死を悲しんだ心優しい少年であったのだ。人の死を幾らも見届ける戦争を心の底から楽しんでるわけも、それによって掴んだ勝利を心の底から喜んでるわけも無い。そんな事があるわけが無いのだ。

浅く息を吐くイングランド。その後が続くのだろう言葉は、しかし言葉にされる事無く空気に溶け込んでいった。

「失礼します」

突然開いた扉とそれと同時に入ってくる部下らしき者。ノックをしなかった事について問いたいところだが、多分顔色が悪い事と息切れをしているところから見ただ事ではない事が起きたのだろう。イングランドもそれが解っているからか、全く言及しなかった。

「・・・・・・・・」

後に続いた言葉を聞いて、イングランドは部屋を飛び出した。その後を追う部下らしき人物の後を、蹴られた事によって痛む体に鞭打って追いかける。

いつかの彼の兄のように、その部下がアントーニョの存在に気付く事は無かった。

* * *

甲板へと出て見えたのは小さな船だった。あの部下の言葉を聞く

限りでは、この船は意思があつて此処まで来たわけではなく偶然此処まで流れ着いたもので、次いで言うならばスペイン船。

「……………落とせ」

低く唸るような声で言われたその声は、しかし部下たちが疑問に思うには至らないものだったらしい。普段とは全く違つのだらう彼の様子に部下たちが反応する事はなく。

その言葉通りあつという間に落とされたその船は、炎上しながら広い海へと消えていった。

何事も無かつたかのように船の内部へ消えていく部下たちに背を向けたまま立っているイングランドは、笑っていた。その頬を濡らしながら、笑っていた。

「（何で自分が泣いとるんかも、理解出来てへんのやるなあ……………）」

次の瞬間にはその笑みは崩れ、彼は空を見上げた。つられて見上げる。そこにあるのはただただ広い青空で、果ての無い世界だった。もう一度、イングランドに視線をやる。表情という表情は浮かべず、しかしその頬はしっかりと彼自身の涙で濡らしながら、ずっとずっと、空を見上げていた。

後ろから近付いて、その目を両手で塞ぐ。

「……………何だよ」

先程私室で見せていた殺気は何処へ行ったのか、彼からはもう、殺気や警戒の様子は欠片も見えなかつた。

アントーニヨから彼に触れているというのに、それを振り払う事もしなければその行為に疑問は投げかけても咎める事はしなかつた。

「見たらあかん」

濡れる指。温かい雫。指の腹に当たる、彼の長い睫毛。どうして自分がこんなところに居るのかも、何故こうなっているのかも、どうすれば戻れるのかも、これは一体どういう事なのかも解らない。

ただ、こんな不思議な事になってしまったのは、アントーニヨが使命を与えられたからだろう。いつの間にか、彼自身が知らぬ間に道を踏み外してしまったそれを、正しい道へと導く使命。

事実がそうでなかったにしろ、そうであったにしろ、アントーニヨはそうなのだと思える事にした。

「空は見たら、あかん」

雨が多い国である彼の国にとって、こんな晴天は嬉しいものなのだろう。きっと彼自身が酷く焦がれ憧れているものの筈で、それを見てはいけないなどと、酷な事かもしれない。けれど、彼は空を見てはいけない。見てはいけないのだ。

曇天の空や雨天の日は雲がある。雨がある。だからいいけれど。それらが導いてくれるけれど。

「晴れとる空見たら、迷ってまう」

国という存在は、人間より、どんな生物より特別な存在だけれど（それは優れている事に関して、逆に劣化している事にしても）、それでもこの地球から言わせてみればちっぽけだ。

そんなちっぽけな存在の一人である彼は、もしかしたらどんな人間より、どんな生物より弱いかもしれない。

晴天の空は雲が無い。雲も雨も無い。そんなところで空を見上げてしまったら、果てしないそれに、終わりの無いそれに、広すぎる

それに囚われて、抜け出せなくなってしまつ。永遠の迷路に迷い込んでしまつ。

「海は、広いから」

海の上に居たら、行く先など解らない。

彼は、何処までも広がる海に置き去りにされた子供だった。

* * *

「今見た事は忘れる、いいな」

再度私室に戻ってきてイングランドの吐いた台詞は何となく予想していたものだった。小さな頃から無駄にプライドだけは高くて、この時代は頂点に立っているという立場的責任感からか、余計にその傾向が強くなっている。

そんな彼が泣いたところを見られたなどと、プライドに反するの
だろう。

「・・・俺が忘れたら、誰がお前の涙を憶えとるんや？」

けれどアントーニヨは忘れてやる事などしようとは思わない。し
たくなかった。忘れたフリすら、してやろうと思わなかった。

忘れたら、忘れたフリをしたら、彼の涙は何処へ消えるのだろう。
誰にも拭ってもらえず、ただ海に混じって誰のものとも解らなくな
ってしまうのだろうか。この時代の彼よりももっと小さかった子供

は、泣く事をひたすらに我慢していたけれど。けれど彼は。

「フランスか？お前の兄達か？お前の植民地か？・・・それともお前自身か？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・覚えてなくて、いいんだよ」

アントーニヨの問いかけに、イングランドは小さく呟くように返した。その目は伏せられていて、薄い肩は小さく震えていた。

「ちやう。憶えとらんでええ事ない。お前すら自分の涙を憶えとらんのや。俺が憶えとらんとあかん」

彼は自分のプライドを守る為に、国としての責務を果たす為に、涙を流した事すら自分自身で忘れ去ってしまう。別にそう確認したわけではない。けれど、彼の様子から想像する事くらいは容易だった。

誰にも覚えられていない。だったら自分で憶えている事しか出来ないのに、彼はそれをしない。自分に泣く事を許さないから、泣いた事を忘れてしまおうとする。憶えていれば、彼はその弱さに気付いてまた泣く事が出来るのに。

「誰かが憶えとらんかったら、誰がお前が泣く事を知って、慰めるんや。誰がその涙を拭うんや？」

泣けない。それは、何より辛い事だ。泣きたいのに泣けない。泣きたいのに泣かない。何より辛くて、何より悲しい事じゃないか。

だったら、誰かが彼の涙を憶えていて、その憶えている誰かが彼の拠り所となるしかないではないか。けれど彼は絶対にフランスの前では泣かないし、フランスももし泣いているところを見たとしても彼が忘れろといえは素直に従う。スコットランドはそもそも

気にしないし、彼の植民地で彼の涙を見る機会がある者など、何処にも居ないだろう。

多分あのやけに彼が執着する新大陸の子供ですら、彼の涙は見ない筈だ。彼が見せないから。

「泣けへん奴なんか、居つてええ筈ないねん」

子供も、大人も。泣きたいなら、泣けばいい。泣き虫の癖に、我慢する必要はこれっぽっちも無い。泣ける場所が欲しいなら、誰かがその拠り所となればいい。

イングランドは人より少し大きめの目を、更に大きく見開いて、アントーニヨをじっと見つめた。

それは驚いているようにも見えるけれど。

「なあ、泣きとうなつたら、俺んとこ来い。思っ存分泣かしたる。必要なら、胸も貸したる」

いつでも。

バキツ！そんな嫌な音がして、体に衝撃が走る。どうやらちょうど鎖骨の辺りを思い切り殴られたらしい。その拳は見えていたし、今度は完全回避も出来たけれど、敢えてそれはしなかった。

「……………避けるよ」

唸るような声で咳くイングランドの声が耳に届いた。その声は特に何かを思わせる事は無かったけれど、鎖骨の辺りに当たったままの拳が小刻みに震えていた。

子供の頃は兎のようだった彼は、猫に変わったただけだった。弱いくせに、その身を守ろうと全身の毛を逆立てて威嚇する。それでも駄目であれば自慢の爪で相手を引っ掻く。そうして、これまでやっ

てきたのだろう。

「……言ったやろ、泣きたいなら、胸貸したるて。避けたらお前は俺を信用してくれへん」

震える拳を右手でそっと包み込む。小さい。小さくて、華奢で、細い。

その手をそっと両手で広げて、自分の胸の上に置いた。

「痛かった。お前、見た目の割りに力強いねんもんな。けどそれがお前の痛みの1割にも満たへん事は解つとる」

彼はゆっくりと腕を折り曲げた。トン、と殴られた方の鎖骨のあたりに頭を置かれる。彼の上半身を支えていたであろう左腕は、既に力など全く入れられていなかった。

彼の体に腕を回す事はせず、ただ彼の体重だけを預かった。

「俺は泣かない。……絶対に、泣かない……！」

独り言のように、自分に言い聞かせるように言う彼の声は、震えていなかった。嗚呼、我慢する事ばかり、上手くなってしまった。ぼたり。彼の目から溢れ出た透明な雫には気付かないフリをして。

「……うん。お前は泣いてへん、泣いてへんな」

あと何回、彼に囁けばいいだろうか。泣く事を我慢する必要はないのだと。思う存分、泣けばいいのだと。泣く事は悪い事ではないのだと。罪ではないのだと。

あと何回、彼を抱きしめれば伝わるだろうか。

「けど、さっきのは覚えとるから」

逃げ道は、此処にあるのだと。

三（後書き）

三。

国って皆戦争に勝つ事には本当に喜んでるけれど、人が死ぬのは例え敵国の人であろうと悲しむんじゃないかな、と。イギリスに限らず。

イギリスは情緒不安定だしネガティブだし、心のどっかで疲れてればいいなど。

いい加減似たような展開で皆さん飽きてらっしゃる頃でしょうかね・
。。。次は特に何も無い回ですが、その次で終わりです。

四（前書き）

特に何も無い。
“夢”の話。

四

行く場所もなく何故此処に居るのかも解らないといえ、イングランドは訝しがりながらも彼の部屋で寝ていいと許可を出してくれた。

一応「スペイン」であると言った筈なのに、最早彼の頭の中からはそんな事は抜けきってしまったようである。それとも、何となく今敵対している「スペイン」ではないと悟ったのだろうか。何しろアントーニヨは一度「お前の知ってるスペインじゃない」と言っている。

まあ何処で寝るにしろ、アントーニヨには関係無い話だが。イングランド以外には誰にも見えていないようだし、それに。

意思や時間帯には関係無く、眠くなってしまうようである。眠気に任せてイングランドが眠る横で座った態勢のまま眠りにつこうとする。

多分、今までの体験からして眠ってしまったら次に目覚めるのはまた違う時代だろう。今度はどの時代だろうか。瞼を閉じて考える。眠気のせいで、予想する前に意識が落ちていった。

* * *

気付けば真っ白な空間に居た。何も無い、ただただ何処までも続く白。特に床と特定できるところも、天井と特定できるところもない。ただ、本当に何も、“もの”という概念すらないのではないかと疑ってしまうその空間に、身を置いていた。

ふわふわとした感覚。これが浮遊感というもののなのかと考える。飛行機に乗っても多少の浮遊感はあるが、きちんと足は床についているし座っている。これほどまでのはつきりとした浮遊感というものは無かった。

けれど、立っていた。床が無いその空間に、アントーニヨは立っていた。一步足を踏み出してみる。歩く事すら、出来るようだ。無駄だと解つていても、何かを求めて歩き出さずにはいられなかった。アントーニヨは殺風景な光景が嫌いだ。これは殺風景とは少し違うかもしれないが、何も無い事は変わらないし面白味も特徴も無く（いや、ある意味では一番特徴があるのだが）て、詰まらない。気が狂いそうだ。アントーニヨの家には必要無いのではないかと思うくらい、色々と置かれている。寧ろ、置かれすぎて部屋はとても汚い。

そんな部屋で生活していると、どうもこのまっさらな空間は落ちて着かない。

けれど歩いてても歩いてても、やはり目の前に広がるのは何も無い白。最早闇の中に居るかの如く、白以外の何も見えない。これは白い闇だった。

「て、白い闇て何やねん」

思った事に一人で突っ込んでしまうくらいには、アントーニヨは参っていた。本当に落ち着かない。早く何かを見つけないかと思うのに、見つける事が出来ない。

右を見て、左を見る。やはり何も変わらない。進んでいるのかも解らない。浮遊感とタイムスリップ以上に有り得ない現象から、これが夢なのだとつくづく気付いている。早く目が覚めればいいのに。

今まで見た夢はこんなアントーニヨにとって苦しいだけのものではなくて、馬鹿げていて下らないけれど、とても幸せな夢だった。

だけど不思議だ。殺風景で、落ち着かなくて、苦しいけれど。それでも、妙な温かさがあった。太陽の下に居るのとも、春の気候のような陽気な温かさとも違う。エアコンなどで人工的に作られた温かさでもなくて、人の肌に触れているかのような。幸せだと感じている時のような。

「夢に温かいとかあるんかいな・・・」

一人ごちて溜息を吐く。目を閉じて、少しの間だけ、瞑想。

特に何か結論を出したわけでもなく、そもそも結論を出しても仕方が無いと目を開けて 其処に広がる光景に、目を瞠った。

先程までであった殺風景だが何処か温かい空間とは違う。殺風景なんて生温いものではなく、温かくも無い。ただ、真っ暗 本当の間で、とても寒い空間だった。

別に薄着をしているわけでもない。それなのに、自身の体を抱いて腕を暖をとろうとしてみようような、そんな寒い空間。

殺風景より、もっと苦しくて。温かさが無い分、とても寂しくて歩き出す勇氣も持てず、ただ立ち尽くした。真っ暗だから怖いのではない。この異様な冷たさが怖かった。寂しくなるような、悲しくなるような。“孤独”を表したような、そんな空間。

先程の白い闇と同じところと言えば、何も無いところ。右を見て、左を見ても、何も無い。目を凝らして先を見つめても、仄かな光すら見えない。ただ、見えるのは自分の体だけで。後ろはどうかと、振り返る。

其処に在った。この空間に溶け込みそうな、唯一の存在が。

「イギ・・・リ、ス・・・」

褪せていても綺麗だった筈の金色の髪の毛、普通なら黒に映える筈の真っ白い肌も、彼が身に纏う緑の軍服も。全てが、この闇に

溶け込んでしまいそうだった。

彼はイギリスだ。イングランドではなく、確実に“今”のイギリスだった。夢の中に居る今、それが本当の彼ではないのだろうという事くらいは解る。けれど彼はイギリスだ。

消え入りそうな声だったとはいえ、この無音の空間で、呟いたアントーニヨの声が聞こえない筈も無いだろうに。それなのに、イギリスは反応どころかぴくりとも動かなかった。ただじっと、膝を抱えて座り込んでいる。

寒くて寒くて、アントーニヨは身を抱えているというのにイギリスは。イギリスは、それに慣れてしまったかの如く身を擦る事もしなければ抱く事もしなかった。寂しい。悲しい。そんな気分させ此処に居て、目の前には自分以外の、唯一の存在であるアントーニヨが居るというのに気付く様子も無い。いや、気付いているのかもしれないが、それに縋ろうとはしない。

この空間は、イギリスそのものだった。

「イギリス、」

もう一度、名を呼ぶ。イギリスは反応しない。

イギリス。イギリス、イギリス、イギリス、イギリス、イギリス、イギリス。

彼の名を連呼する。それでも全く動こうとする気配の無い彼に、アントーニヨは手を伸ばした。ぴくり。僅かに揺れる肩。やっと見えた、小さな反応だった。

「イギリス」

再度名を呼んで、その頬に触れようと。

四（後書き）

本当は五にそのまま入れるつもりでしたが、長さの問題と話の展開的な問題で分けました。

「イングランド」ではないイギリス。

次の話で終わりです。ただし次の話が一番長い。

五（前書き）

これが最後。取り敢えず長い。

五

ドンツ！

何処からか聞こえてきた派手な音で、アントーニヨは目を覚ました。

瞼を上げて、一番最初に目に入ったのは自分の腕。顔を上げて、周りを見渡す。其処は見慣れた会議場だった。使われた形跡の無いホワイトボードと、落書きだらけの黒板。それから、デジタル文字に几帳面な字で付け足された「最重要事項」の文字のある、皺だらけの書類。

どうやら自分の腕の下敷きにしてしまっていたせいで、皺だらけになってしまったらしい。

立ち上がって、窓に近付く。外の光景も、見た事のあるものだった。

此処はロンドンの会議場。

もしかして、“今”に近い時代で会議終了後なのだろうか。窓の外、夜空に浮かぶ三日月。他の国はもう帰ってしまった後らしく、察するにこの時代のアントーニヨも帰ってしまったているのだろう。

「……………、今度は何すればええんや」

途方に暮れて、頭を掻く。慣れた場所に居るのはいいけれど、他者に姿は見えていないし人に触れないこの状況で、どうすればいいのか皆目検討もつかない。今までのように気がつけば目の前にインランドが居る、というわけでもなく。これだけ現代に近い状態なのだから、もう既にイギリスなのだろうが。

考え込んだって仕方が無い。元々じっとしているのが好きではない性分のアントーニヨは、その会議室を後にする。

ピリリリリ、扉を閉めた途端に鳴り出した携帯に心臓を跳ねさせ

た。振動を伝えている事からして、自分のだろう。己のポケットから携帯電話を取り出して、着信画面を見る。ロヴィーノからだった。途端に今まで考えていたことも忘れて通話ボタンを押　そうとして、はたと気付く。

アントーニヨは、イングランド以外のその時代の人物とは干渉出来ない筈で、普通なら電話は掛かって来ない筈だ。なのに何故、今自分の携帯電話は着信を知らせる音楽と共に振動を伝えているのだろうか。

その事実思い至って、恐る恐る着信ボタンを押し、耳に押し当ててる。

「ロヴィ・・・？」

同じように恐る恐る発した声は、果たして向こうに届いているのだろうか。

『出るのおっせーんだよ馬鹿トーニヨ！！』

突然鼓膜を盛大に震わせた子分の声に、思わず安堵した。それは繋がっている事にであり、何ら変わらない子分にであり、久しぶりに聞く声にもある。

携帯電話をトイレに水没させてしまつてこの間変えたばかりだ。勿論電話番号も違う。それなのに、ロヴィーノは知っているし繋がっている。ということはこの声はアントーニヨの知る時代のロヴィーノなのだろう。

『今まで何回掛けてもお前出ねえし、何してたんだよ』

電波で繋がる子分のその問いかけに、アントーニヨは思考を奪われた。

出ない、というのは一応繋がってはいたという事だろうか。しかしアントーニヨの携帯が鳴った記憶は一度すらない。一方的なものだったのか。それとも、他に何か。そして、今まで繋がらなかったものが何故今繋がったのか。

そこまで考えて、もしかしたら・・・、ともう一度会議室へと入る。そこで月明かりに照らされて見えるカレンダーを見つけて、特定の数字を探した。

探し始めて数秒。すぐに見つかったそれは、アントーニヨが予想したものだっただ。

「2011年・・・」

小さく呟いたその言葉に、ロヴィーノはよく聞こえなかったのか不機嫌そうに何か言ったか、と問いかけてくる。それにも答えず、ただアントーニヨは疑問のひとつが解決された事に安堵した。

アントーニヨが元居た時代に戻ってきたというのなら、特に何かをしなければいけないという事も無い。それに、今までのようにイングランドだけにしか姿が見えないという事も無いだろう。

そういえば、もしかしてこの時代から飛んでしまっただけで暫く経っているのだろうか。

そんな風に思考を巡らせていると繋がったままだった電子機器から怒鳴り声が聞こえてくる。

『聞いてんのかコノヤロー!』

多分今まで散々電話を掛けていたのだろう。それでも出ないから、きつと心配してくれていたのだ。それを指摘すると更に怒ってしまったから、言わないけれど。

「あ、えっと、親分寝とつたみたいや」

咄嗟に思いついた言い訳だったが、強ち嘘でもないだろう。時代を移動するときは寝ていたし、此処に戻ってきた時も寝ていた。

まだ一つ解決していない疑問を解決したいのだが、その前に自分との電話をきちんとして終わらせるのが先だろう。聞こえてきた舌打ちに、申し訳なくなりつつどう電話を終わらせるか懸命に考える。

が、

『……飯作ってフェリシアーノと待ってるから、早く帰って来いよ』

それも虚しく案外あっさりと言ヴィーノは電話を切った。返事をする暇も無かった。

ふう、と溜息を吐いて、今までロヴィーノの声をこちらに伝えていたその機器をポケットに仕舞う。

そうして再び静寂が訪れたその会議室で、アントーニヨは考えを巡らせた。まだ何故時代を移動していたのかが解っていない。其処では必ずイングランドと呼ばれた時代のイギリスが居たし、彼に関わって取り敢えず事が落ち着いた、という時になってまた時代を移動していた。

そういえば、この時代で眠りについたのも起きた場所と同じところで、思い出せば会議終了後唐突に眠くなって、フェリシアーノと先に帰ると言うロヴィーノに返事をした直後に寝てしまった気がする。

「……まさか、夢……?」

呟く。しかし夢にしてはやけにリアルで、痛みもあった。人の体温も感じたし気温というものも感じた。夢として片付けるにはあまりにも。

しかし、夢であると思わなければ納得出来ないところが多い。

随分ややこしく不思議な体験をしたものだと思いつながら、アント
ーニヨは取り敢えず自分が待つてあろう家へと帰る事にした。

帰りながらも考える。だが、全く答えは見つからなかった。どこ
るか、どんどん泥沼にはまっていく気がした。例えば夢だとすれば、
眠る度に時代を移動したのもあの有り得ない事が起こったのも納得
出来る。しかしリアルすぎたし痛みもあったし、何よりどうして嫌
いだった筈の彼が出てきてしかも自分はそれを慰めたのだろう。そ
れに、夢の中で夢を見る、なんて現象が起こったという事になる。

そもそも夢の内容なんてすぐに忘れるもので、普通これ程までに
はつきりと憶えている事の方が珍しい。

「うがああ！俺難しい事考えるん苦手やねん！」

誰に言うでもなく頭をガシガシと掻きながら喚く。誰も居ない広
い廊下に響き渡ったその声は、ただアントーニヨを虚しくさせるだ
けだった。

その後も考えながら、肩を落として廊下を進む。ある部屋に差し
掛かったところで、突然その扉が開いた。

* * *

夢を見ていた。長い長い夢を。寝ている時間としては半日も寝て
いなかったのに、夢を見ていたのはまるで数日間に及んでいるかの
ように思われる程の夢。

愛される事を願ったあの頃。世界を夢見たあの頃。孤独を愛した

あの頃。

目を覚ますと其処は休憩室で、そういえばあまりに眠い為に誰にも言わず休憩室で仮眠を取ろうとしていたのだと思ひ出す。長くて優しい夢のせいで、一瞬何をしていたのか、何処にいるのかが解らなくなつてしまつた。最早、仮眠どころの睡眠時間ではなくなつてしまつているけれど。

何故あんな内容の夢を見たのかは解らない。どうして夢の中に、彼が出てきたのかも。けれど幸せで、とても寂しい夢を見た。

彼が触れて、撫でて、抱きしめて。慰められたのは、確実に。

身を起こして壁に背中を預ける。そうして思い起こすのは、夢の内容。

彼が出てきて触れたのは、アーサーだった。小さなアーサー。少しだけ成長したアーサー。覇権を握つたアーサー。けれどそれはイングランドであつて「イギリス」では無かつた。

確実にイングランドの視点だった。けれど其処に居るその時から、決してアーサーに支配権は無かつた。イングランドがその体を支配して、言葉を発する。なのにただ、イングランドの体の中に、アーサーの意識はあつて。目線も全て、イングランドの目線と重なつていた。彼が優しくするのはイングランドで、アーサーはそんな優しい彼を、何処か客観的に見ているだけ。

どの時代でも同じだった。意識だけはイングランドの中にあつて、目線は同じ。けれど動くのはイングランドの意思。

「俺」が優しくされたわけじゃない」

あの言葉も、行動も、全てが「アーサー」という存在である筈なのに、けれどイギリスという存在ではないイングランドが発したもので。イングランドも過去のアーサーである。アーサーが発したもものには変わりはないけれど、それは今のアーサーではない。彼は子供が好きだし、あの頃は今に比べても純粹に愛されたいと願つてい

た分、綺麗な心を持っていた。

彼は、決して今のアーサーの言動や行動を許容したわけではないのだから。アルマダの時期のイングランドにまで優しくしたのは何故か解らないけれど、多分彼は今のアーサーに会っても。

そもそも、夢だ。本当にあつた事ではない。彼はアーサーが体験したこの事を知らないし、知っていたとしても何も変わらないだろう。あれは、アーサーが見た都合の良い夢であつて。

それを理解した途端、なんだかどつと疲れた。

苛々とすらしてきて、思わず壁を殴る。ドンツ！と思った以上に凄い音がしたが、アーサーはそれに構わずベッドから降りた。どうせ、もう会議場には誰も居ない。

そのまま寝てしまった事によりついた軍服の皺を手で出来る限り伸ばす。そして窓へと近付くと、躊躇せずそれを開け放った。

夜になつたからか涼しいその風に、暫しの間撫でられる。そうして自分を落ち着かせようとしているところに、突然着信を伝えるバイブル音。眠っている時に鳴ると邪魔だからと、マナーモードにしていたのだ。そのまま近くの台の上に置いていたそれが、振動で台をかたかたと震わせて音を出していた。

それを手にして確認した途端、小さな溜息を吐く。

「Hello . 何か用かアルフレッド」

着信ボタンを押して耳に押し当てると同時に、そう切り出す。

このローテンション且つ不機嫌な時に、あのハイテンションな声と言葉を聞くのは正直疲れる。幾ら大切にしている存在だからと言って、今ばかりは喜ぶ事は出来なかつた。

『やあアーサー！何だい何だい！景気悪そうな声出してさ！』

「・・・相手がお前じゃなければ、此処までなんねえよ」

『相変わらず皮肉を言うのが好きだなあ君は』

やはりというか何と言うか、返ってきたのは無駄にテンションの高く大きな声で。寝起きの頭にはかなり響く。これなら隣国の変態の方がマシだったか、と考えて、あいつもノリが変だから駄目だと即座に否定する。

暫く意味の無い会話を続けて、もう一度用は何だ、と切り出すと、彼はやっと本題に入った。

曰く、今日はアーサーの家に泊まろうとしていたらしいが中々帰ってこない為に今困っているらしい。横着をせずにホテルを取ればいいものを、アーサーが甘やかしすぎたせいかこの上無く我俣に育ってしまった元弟はどうにかしてアーサーの家に泊まろうとしているらしい。

しかし独立してしまった弟とまた過ごせるのは嬉しいものである。あの夢のあとで随分不機嫌だったアーサーだが、彼のその電話で少しだけ気分が良くなった。自分でも、現金だとは思うが。

『じゃあ早く帰ってきてくれよ！お腹が減って仕方が無いんだ』

不味い不味いと言いつつも出したものは大抵食べる彼は、どうやら会議中あれだけハンバーガーを食べていたというのに既に空き腹らしい。

解った、と返事をして通話を切ると、窓を閉めて扉へ向かって歩き出す。

扉まであと数歩というところで踵を返して、数分前まで身を沈めていたベッドの前まで戻ってくると、皺だらけになっているシーツを綺麗に整えなおす。ほぼ元の状態に近くなったそれを満足そうに眺めて、再び扉へと向かう。

ガチャリ、扉を開けてその影から出ると、丁度扉によって隠れていたらしい人影が見えた。

月明かりのみで照らされていた仄暗い休憩室から、いきなり明る

い廊下に出た事により眩しさで最初誰か解らなかったが、目が慣れ
てくると同時に誰かが解った。

今は会いたくない、夢に出てきた彼だった。

* * *

扉が開いた事に驚いて、思わず足を止める。てっきりもう皆帰っ
たと思っていたのに、どうやらまだ残っている人物が居るらしい。
扉の向こうから姿を現したのは、少し不機嫌そうな顔をした、今の
今まで頭の中を占めていた人物だった。

眩しそうに目を細めた後、段々と慣れてきたのかはつきりとその
視線がアントーニヨを捉える。その目が驚きに見開かれて、その後
そっと目を逸らされる。

いつもの彼ならば嫌味の一つくらいはさっと出てくるものなのに、
珍しい事もあるものだ。しかも、こんな時間まで会議場に居残って
いて怒られないとは。

「……………イギリス」

どうすればいいのか解らなくなって取り敢えず声を掛けたが、失
敗した。先程までの体験のせいで、いつものように彼に、イギリス
に、接する事が出来るとは思えなかった。変に優しくしたって、彼
は訝しがるだけだろう。

夢か不思議体験か解らないあの時代の移動を繰り返した後に見た
不思議な空間の夢。あれだけはハッキリと解る。夢だったと。真っ
白い空間に居たのは自分だけで、それでも温かかったのに。真っ暗

な空間には、イギリスが居て。彼はただ座り込んでいた。その瞳が目の前に居るアントーニヨを映し出す事は無く、多分、何も見えてはいなかったのではないかと思う。

イギリスはアントーニヨの呼びかけに少しだけ視線を向けて、そして再度目を見開いた。

「お前、その腕の傷……………」

消え入りそうな声で呟かれたそれは、しかしこの静かな空間ではよく響いた。

はつとして腕を見る。痛みは無かったが、確かに腕に赤黒い染みが出来ていた。あの、彼の兄によってつけられた傷。

夢では、ない？

先程感じた疑念を否定するような事柄。しかし、夢でも思わなければ納得が出来ない出来事だった。夢だったとしても、不思議な事であるというのに。

「……………あの時の、」

そう言つて、視線をイギリスに移す。彼は信じられないような顔でその傷を見ていた。もしかしたら傷自体は治っているかもしれない、その痕を。

あまりに過剰な彼の反応に、まさか、とある可能性に至る。だとすれば、あれは尚更夢である可能性が高くなる。夢であったとしても普通は有り得ない現象だし、あまりに不思議な偶然ではあるが、最早夢としか考えられない。

一步。イギリスに向かつて足を踏み出したら、突然彼はアントーニヨが今まで歩いてきた方向とは逆方向に走り出した。様相としては、逃げ出したという表現が最も相応しいだろう。

「え、ちょ……！イギ、」

それを追いかけてアントーニヨも走り出す。イギリス、と紡ごうとした口はしかし、呼ぶより追いかけた方が早いと判断した思考によりその仕事を放棄した。ほぼ反射的な行動だった。

以前の、というか、あの不思議体験をする前ならば絶対に追いかけるなんて事は有り得なかっただろう。例えイギリスが　泣きそうな顔を、していたとしても。

前を走る彼との距離は縮まらない。老大国と揶揄される彼はしかし、運動神経は衰えていないらしい。長らく過激な運動はしていないだろう事はあの貧相な体を見ても明らかなのに、彼は全く以て速かった。

しかしやはり、体力は無いらしい。最初は全く縮まらなかった距離は、1分間も走ればもう目前だった。

「っ………捕まえたで……！」

腕を捕まえる事はせず、首に手を回す。腕を捕まえただけでは、きっと彼はすぐに振り払ってしまう。

お互いに荒い息を整える事に必死で、暫くはただ不規則な息遣いの音だけがその空間に満ちる。

「何なんだよ………」

暫しの沈黙の後、最初に口を開いたのはイギリスだった。その頬はまだ上気していて、息も荒く肩も激しく上下している。

けれど彼は、まさに必死という形容がぴったりな様子で喋り続けた。

「何なんだよ、お前は………」

それはあまりにも難しい問いで、あまりにも悲痛な叫びだった。

「お前が優しくしたのは、俺が小さかったからだ！子供だったからだ！子供好きなお前だから、当然だよなあ！？」

嗚呼、やはり。

その彼の言葉で確信した。彼は同じ夢を見ていた。何処からかは知らないが、夢の中で、アントーニヨが子供の彼にした事を全て見ていたのだ。

彼にとってそれは、あまりに残酷な偶然。先程までアントーニヨが自分だけがそんな夢を見ていたと思っていたのと同じで、彼も自分だけがあんな夢を見ていたと思っていたのだらう。優しくされるのに慣れていない彼にとって、苦しい光景だっただらう。彼の言葉通り、「子供だから優しくしてくれる」のだと思ってしまうから。何せ夢は願望の表れだ。そう、物知りな東洋の国が言っていた。彼の願望が引き起こした儚い幻。そう、彼は認識していた筈だ。

「お前が優しくした相手はお前にとって単なる“子供”であって、“俺”じゃない！そうだらう！！」

必死で涙を堪えているのだらう。何故そう思ったのかは解らないけれど、瞬間的にそう思った。

散々走り回ったおかげであの広い会議場からとっくに出ているが、既にその辺りに人は居なかった。もし人が居れば、こんな公衆の前で二人の男がくっついて、しかも一人が大声を上げている光景など、見せ物にしかならなかつただらう。

だから、彼の叫びも冷静な頭で聞く事が出来た。

「そうやって言ったら、お前はどないする？」

彼の問いに、はいといいえのどちらかで答えると言われたらきつと、アントーニヨは答えられない。アントーニヨ自身、よく解っていないのだ。本当に彼が子供だったからあんな風にならなければならぬか、彼という存在だったからなのか、それともどちらもなのか。

けれど、もし子供だったから、という理由だけならば今の彼に此処まで寛容的になれているのはどうもおかしい気がする。

常に情緒不安定な彼は、アントーニヨのその台詞を聞いた途端、強張っていた身体の手を抜いた。否、抜けた、の方が正しいか。

「何で……」

その場にへたり込みそうな勢いで崩れ落ちた彼の腕を引っ張って、何とかそれを阻止する。全く、成人男性の身体をしているくせにどうしてこうも細く軽いのか。引っ張った時に感じた重量感は、思っていたより幾程も少なかった。

こんなアスファルトの上でへたり込んでしまったら、汚れてしまう。その汚れを見て嘆くのは彼自身のくせに。

「ただの夢なら良かった……」

嗚咽を噛み殺したような声。しかしその頬を雫が流れる事は無い。子供の彼のように必死でその涙を堪えているのだろう。どうして彼は、そうまでして人に涙を見せようとしなののか。

震える声で紡がれたそれは、今彼が本当に望んでいる事なのだろう。しかし生憎、アントーニヨは同じ夢を見ているし、夢の内容をはっきりと覚えている。

「ただの夢なら、期待なんてしなくて良かったのに……」

「!!」

殆ど力の入っていない身体を無理矢理立たせて、イギリスは全盛期だった時の彼のように、アントーニヨを殴る。それにすら力が入っていないくて、ぽすん、と間の抜けた音を立てたそれは全く痛みを感じさせなかった。

泣きたい時は泣けばいいと思うが、けれどこんな事が涙の原因だなんて事は嫌だ。原因が、アントーニヨ自身だなんて。泣くのを我慢しろ、とは言わない。ただ、泣く原因となったそれを払拭したい。

「……………そう思つとるんは、お前だけとちゃうで」

静かに、抑揚の無い声で告げる。途端に小さく震えた肩に右手を添えて、左腕でその細い腰に腕を回し持ち上げた。やはり、軽い。あまりにも軽々と持ち上がってしまったその重みを感じて、アントーニヨは顔を顰めた。

突然の事に反応すら出来ていないイギリスからの抵抗がある筈も無く、易とも簡単にアントーニヨの思い通りにする事が出来た。

数歩歩いたところにある花壇の囲いにイギリスを座らせる。あんないつまたへたり込むかも解らないイギリスをあのままにしておけば、確実にその衣服が汚れていた事であろう。面倒くさい事は極力避けたいというのもあるが、今からアントーニヨがする行為に対する信憑性を持たせる為のものでもあった。

「俺も、俺だけが見とる、ただの夢やったらよかったと思うた」

優しくされる事にも愛される事にも慣れていないイギリス。彼の愛の国ですら、本当の愛は彼に教えてやらなかった。それはいつの時代も変わらない。だったら、どの時代の彼でも、どんな彼でも。

「なあ、泣かんといてや。俺が原因の涙なんて、見とぅない」

目許に薄っすらと溜まっていた透明な液体は、ついに彼の頬を滑り落ちた。それを見て、アントーニヨは言う。

途端にぼろりぼろりと留まる事を知らず流れ落ちていくそれ。あつという間に、彼の足元のアスファルトを黒く塗りつぶしていった。全くとまる気配の無い彼の涙を、アントーニヨは自身の指で拭う。あっさりと言の指の腹を伝って地面に落ちたそれを見て、やるせない気持ちになった。

泣かないでほしいのに。アントーニヨが原因である涙など、アントーニヨ自身が受け入れられるわけがない。胸が苦しくなってしまう。

どうすれば、彼に伝えられるのだろう。今、アントーニヨの胸の内にある思いを。

「ただの夢やったら、お前がこんな風に泣かんでも良かったんかな・・・」

ただの夢だったとしても、そうでなかったとしても、きっとアントーニヨの彼に対する態度は全く変わらなかっただろう。それでもイギリスにとっては違うらしい。それはある意味当然の事かもしれない。彼にとってこれがただの夢であるというのは、アントーニヨが同じ夢を見ていなかったという事だ。アントーニヨがこれを見ていなかったらアントーニヨのイギリスへの対応は、今までと何ら変わらなかった。それは、イギリスのアントーニヨへの対応もだ。

そうすれば、きっと彼はずっとずっと愛を知らずに過ごし続けていただろう。

アントーニヨが今、彼に“何か”をしなければ、夢を見ていようと見ていなくなるのと、それは同じになってしまう。

「どうして、」

不意にイギリスが口を開く。その声は相変わらず震えているし、その頬を流れる涙も止まる事を知らない。

「どうして、そんな期待させるような事ばかりするんだ……」

期待している。言外にそう言っているその台詞とは裏腹に、全てを諦観しているような、静かな眩きだった。

ここで初めて、アントーニヨは彼とアントーニヨ自身の存在を比較した。彼の言っている事が全く、アントーニヨに理解できなかったから。意味は理解出来ているのに、肝心な部分が理解に及ばない。だから、考えてみた。あまりに正反対だった。

朗らかで周りに必ず人が居て（つまり人気者であって）自分から進んで話しかけに行くアントーニヨに比べて、イギリスは陰気で内向的、更に大体一人で居るかアメリカ、フランス辺りと喧嘩しているだけで、相手が日本でも中々自分から話しかけようとはしない。そして、アントーニヨは呆れる程に楽観的で、イギリスは呆れる程に悲観的だった。

普通は、というか、アントーニヨなら「こう解釈する」というものを、彼はものの見事に真逆の解釈をしてくれる。

焦れたい。

「………、アーサー」

名前 否、国の名で呼ぼうと開いた口を一度閉じて、もう一度開き、“名前”を呼んだ。国としてでの彼ではなくて、人間としての彼を。

虚空しか見つめていなかったアーサーの目が、アントーニヨを見

上げ、そして映す。アントーニヨよりも透明で綺麗な、緑色の瞳。水に濡れていよいよ宝石のようだと思った。その目は驚きに見開かれている。

そんな彼に柔らかく、優しく、そして温かい笑顔を向けて、両腕を広げる。いつかの彼にしたように。

「やめろよ………」

けれど彼は、すぐに顔を俯けて振り絞るように拒む言葉を吐き出した。

「やめろよ、さつきから期待させるような行動ばかり取りやがって！どうせ明日になったら今日の事後悔して、いつも通りなんだろう！？」

どうして伝わらないのだろう。アントーニヨはこんなにも、アーサーに優しくしたいと思っっているというのに。どうしても、肝心な部分だけが伝わらない。言葉にするのは苦手だから行動で示そうとしているのに、彼はその全てを理解してくれないどころか、何処か否定的に見て、全てを悲観的に捕らえている。

例え言葉で示したとしても、彼は理解してくれないのだろう。言葉でも行動でも伝わらないのなら、一体どうすればいいのか。愛を知らない国に愛を教える事が、こんなに難しい事だなんて。

この子に今まで憎悪の感情だけしか教えてこなかった彼の兄達と、本当の愛だけは決して教えようとしなかった愛の国が、とても恨めしかった。

「お前さつきから何でとかどうしてとか疑問ばっか投げかけてきよって、いい加減ぐだぐだうっさいねん」

それに、勝手に俺の気持ち決め付けんなや。
そう付け加えて。しかしその声は何処までも優しげで、刺々しさ
や苛々など何処にも含まれていない。

「ええから、はよ来い」

命令口調で、しかしそれは小さな子供を促すように、あやすよう
に。

それでも頑なにそこから動こうとはしないアーサー。顔を上げる
事すらせず、その表情は解らない。ただ、滴り落ちる雫から、彼が
未だに泣いているのだという事だけは解った。

泣くなや。心の中で呟く。こんな事で、彼が泣く必要は無いの
に。泣かないで、いいのに。

痛む胸を無視し腕を広げるのをやめて、アーサーの隣に腰かける。
アスファルトの上ほどではないにしろ、やはりそこも所詮花壇の
囲いだ。土はあるし綺麗とは言いがたい。これは、どちらにしろ汚れた
かもしれへんなあとどうでもいい事を考えて空を見上げ、言う。

「難しい事はつか考えよるからあかんのや。偶には素直に物事受け
入れてみい」

足を投げ出して、曇天の空に明日はイギリスは雨やろかと考えて
視線を空に遣ったまま、目を閉じる。

夏でも暑くなりすぎないイギリスの土地の夜風は、少し肌寒い。
アーサーは、寒くないだろうか。ただでさえ細くて薄い彼はアン
トーニョよりも気温の低さに敏感な筈だ。そう思ってアーサーを見
ようと視線を落としたところで、肩に重みを感じた。同時に、微か
な温かみを。

「こつち見んな」

それが想像するものであると確認しようとする、短く制止の声
が掛かった。それを守らなくてもばれる事はないだろうに、アント
ーニヨは馬鹿みたいに素直にそれを守って視線を元に戻す。

肩が段々と濡れていつている事を考えると、多分、頭を肩に乗せ
ているというわけではなく顔を押し付けている形なのだろう。視線
は遣らないまま身体全体をアーサーが居る方に向ける。首や頬に髪
の毛が当たってくすぐったいが、それが逆に心地良かった。その頭
に手をやって、ゆっくりと撫でた後そのままそこに位置を落ち着か
せた。

「……明日には、いつも通りになつとるよ。戻るなんて事
は、せえへん」

明日には、これが“いつも”になっている筈だから。
その真意が彼に伝わっているかは解らない。ただ、確かめるよう
に握られた服の裾がその言葉に頷いているように思えた。

五（後書き）

愛を知らない国、最終話。

最後までお付き合いただき有難う御座います。

元々これは分けるつもりで書いてたお話でした。

短編なんですけど、連載風に、そして長く。中編といえるほどの長さではないのですが。

何せこの話の展開と書き方だと、話を一話二話という形で纏め上げて分けて投稿する方が、味が出るかと思ったので。

何より、まあこれは正直予想だにしていなかったことなのですが30000文字を超えるものになってしまい、そもそも中心的活動がpixivなものですから一つに纏める事が出来ないのです。

最後の話が此処まで膨れ上がり、そして此処まで長くなる予定は全くなかったのですが、プロットを立てない私はいつもこんな感じで自分で書いときながら予想外の展開に持って行きます。書き始めた当初は「3〜5くらいで終わらせるぞ」と意気込んでいたので、その予定だけは全く変わっていないのですが。

これ書き終えた後に、「独立のとも書けばよかったかなあ」って思ったのですが、正直そんな話まで入れてしまおうと収集つかなかったので入れなくて良かったと今思ってます。

さて、終わったので伏せておいた色々な説明をしておきましょうか。まず、何故親分がそんな時代に飛んでしまう夢を見たのか。しかも、色んな時代を。それは妖精さんの仕業です。別に後から考えた都合の良い設定ではなく、最初からこの設定で書いてました。アーサーが親分に対して、恋愛感情ではありませんがなにやら好意を持っているに気付いて気を遣ったんです。そして、アーサーにも同じ夢を

見させた。アーサーは別に見なくても大して結果は変わらなかったのですが、私のシリアスな話でそれらしさを出す為に利用しただけです。

そしてスコ兄が親分を全く見なかった、見えなかった理由は、親分が見たそれは実際に有った事で本来親分はそこに存在している人物ではないからです。スコ兄には、本来刺さるべきだったイングランドの腕に矢が刺さっているように見えています。そもそもスコ兄どころか、イングランド以外には親分の姿は見えてません。

そして勿論、“夢”の中で起きた出来事ですから“今”のアーサーや親分の精神的なもの以外に何か過去に影響するということ事は決してありません。どの時代のアーサーも、涙を誰にも見せず隠して生きていきます。

では何のために妖精さんは親分とアーサーにあんな夢を見せたのか？それは単純に、親分にアーサーの「本当」を見つけてもらうためです。

そんな変な裏設定がある話でした。

この後日談としていつか続きの短編を書く予定です。
その時はまた、宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7905v/>

愛を知らない国

2011年10月9日13時16分発行